

視察調査報告書

委員会名	文教経済委員会
参加者	委員長 小田 高之 副委員長 野島 さつき 委員 伊藤 正義 三浦 康宏 金山 直樹 瀬戸 清太郎 原 紀彦 野々山 雄一郎 田口 正夫
視察日時	令和7年1月22日(水) 10:00~11:30
視察先・概要	東京都渋谷区 人口: 231,413人 世帯数: 143,607世帯 面積: 15.11km ²
視察項目	教育データの活用について
視察概要	<p>1 渋谷区の教育ICT基盤</p> <p>(1) 教育ICT環境の整備</p> <p>ア 基盤1.0 (2017.9~2020.8) 1人1台端末の配付、「いつでもどこでも学べる」ICT環境の整備</p> <p>イ 基盤2.0 (2020.9~2025.8) 1人1台端末と教育ICTの刷新、教育ダッシュボードの整備・発展、教育ICTフルクラウド化の検討</p> <p>ウ 基盤3.0 (2025.9~) 教員及び児童生徒の使いやすさを追求、基盤構築及び運用コストの低減、国が推進する認証によるアクセス生業と前提とした構成への切替え(ゼロトラスト構成)、多様な先端ツールを柔軟かつセキュアに活用できる環境構築</p> <p>エ タブレット端末や主な機能 端末: Microsoft「SurFace」 ソフトウェア: 学習支援ソフト「ミライシード」 システム: C4th(校務支援、勤怠管理)、ADMS(ID管理システム) ツール: Home&School(保護者連絡ツール) i-Filter(フィルタリングソフト)</p> <p>オ 行政基盤との連携 行政のTeamsにアクセス可、VDIにより文書管理システム、財務会計システムが利用可能</p> <p>カ その他 学習者用デジタル教科書の購入、教育データの活用</p>

2 教育データ利活用の取組

(1) 教育ダッシュボード（指導の高速化・公務の効率化）

ア 子供一人一人の幸せ（well-Being）の実現

教員の子供理解に基づいた指導・支援と子供たちの学校満足度（QoL）の向上

イ 内容

（ア） 個人状況シート

学校に関するアンケート回答、体力テスト結果、欠席・遅刻・保健室来室情報、タブレット利用状況、朝のいまの気持ち

（イ） クラス状況シート

アンケートの傾向分類、朝のいまの気持ち、Hyper Q Uテスト結果、欠席・遅刻・保健室来室情報、学校に関するアンケート回答、タブレット利用状況

ウ 効果

データを利活用して感覚による気づきを可視化、経験の差による見落としを減少、複合的な視点による早期対応・早期支援、先入観の修正

⇒個々の子供の課題を担当が抱え込むのではなく、管理職とも共有し、チームとして迅速に対応

⇒特別支援校内委員会、ケース会議、いじめ対策委員会等で子供のSOS発見や情報共有に活用

エ 現場の声

（ア） 教員

一つのデータや情報だけではなく、本人からの生の声を含む複数の情報を掛け合わせることで、より客観的な子供理解につながる。

（イ） 保護者

教員の見取りによる様子とダッシュボード上の情報を掛け合わせることで、情報の客観性が向上し、納得しやすい。

オ アンケートの分析

「教員一人当たりのダッシュボード利用時間」が長い学校ほど、「学校に相談できる大人がいるか」の質問に「とてもそう思う」と回答した子供の割合が多い傾向がある（相関係数0.51：かなり相関関係がある）。

(2) 児童生徒ダッシュボード・振り返りアプリ（HACHIアプリ）

ダッシュボードアプリによる「振り返り活動・日記」「認め合い活動」「教員の見取り・支援」の仕組み化・パッケージ化

ア 概要

（ア） 友達の良かった点や授業の振り返り、学校生活の日記

	<p>等をアプリに入力</p> <p>(イ) 教員からのコメントやポジティブな返信</p> <p>(ウ) 自らの取組や頑張りが可視化された児童生徒用ダッシュボード</p> <p>(教員用にはクラス等の状況・変容を可視化)</p> <p>⇒ 子供自身の学習・生活面の振り返り</p> <p>ウ 現場の声</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員：学習内容の変化が可視化されていて分かりやすい。また、忙しい中でも、日記で子供と話せるなど、コミュニケーションの選択肢が増えた。 ・子供：授業の目当てを意識できるようになった。友達のよいところを見つけたり、自分の苦手を克服したりするために利用している。 <p>3 課題、展望</p> <p>(1) 現状の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活用率の伸び悩みや多くのデータを集約しているため、慣れていない利用者にとっては利用しづらいこと ・新たな開発要望や、より客観的なデータの収集 <p>(2) 今後の展望</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ダッシュボードを活用したモデルの創出、周知、普及 ・特に注意を要する子供の情報について、アラート機能の増強 ・教員がデータからあらゆる情報を取り入れて活用するための支援方法
<p>所 感</p> <p>※視察しての感想や岡崎市への提言など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校生活アンケートや出欠情報、タブレット利用状況など、様々なデータをダッシュボードに集約することにより、クラスの状況や個人状況を客観的に読み取り、課題の早期発見、丁寧な指導、支援に結び付ける取組は参考になった。児童生徒向けダッシュボードアプリでは、反省ではなく振り返り、認め合い、教師からのポジティブなコメントなどで、自らの取組や頑張りが可視化されている。児童生徒もうまく活用し、やる気につながっているようで、参考にしたいと思う。 ・国が進めているGIGAスクール構想を区独自で発展させ、生徒一人一人の様々な情報を集約し、状況をより分かりやすく、効率的に把握しようとする取組は素晴らしいと思う。基本的には生徒と直接話す、顔を見るなどして状況の変化を把握すべきとは思いますが、先生たちは日々業務に追われて忙しくされているので、生徒の心境の変化などを、ダッシュボードを活用して把握するという補完的な役割ができることはとてもよいことであると思う。児童の振り返りにおいて、ここが悪かったから、次はこうしようの「Bad Next

t」ではなく、ここがよかったから、次も頑張ろうの「Good Next」につなげる仕組みも興味深いと思った。気になったのは、ダッシュボードを活用することで生徒とのコミュニケーションをオンラインで行うことが多くなり、弊害が出ないかということである。今でも生徒間においてSNS等で問題が生じているが、生徒と先生でもデジタルな文字でのやりとりの多用は誤解を生むことにもつながりやすいため、そこは細心の注意が必要であると思う。また、昨今DXを推進した欧米において学力、注意力、集中力の低下が問題視され、紙での学習に戻す動きもある。デジタルはとても便利だが、主ではなくあくまでも補完的なものとして活用し、従来の学習のよさを大切にされたい。

- ・2022年10月から教員向けを、2023年10月から児童生徒向けに運用を開始し、それぞれに自身で入力したデータを学校教育に活用する教育ダッシュボードの取組は非常に興味深いものだった。まだスタートから日が経っていないので、これからもっと有用な使い方や取組に広がる可能性を感じられ、現時点でも子供達、また教師の日常に双方向でも成果が挙がっている現状をお聞きし、活用の仕方いかんによっては本市だけでなく、多くの地域で広く取り入れられるものになるかもしれないと思った。その意味でも、また時間をおいてその後を調査されたい。
- ・2020年にいつでも学べるICTから、教育データ活用を軸としたICT環境の刷新に着手され、その核となる仕組みとして教育ダッシュボードが位置付けられる。教員向けは、児童の出欠席他の情報、児童生徒向けは、学習・生活内容の情報を可視化し、分析元データとして活用ができる。教員はデータを参考にし、クラス及び児童ごとの状況を数値で把握し、判断材料の一つとして、児童は自身の状態を可視化することで、親とのコミュニケーションの一つとして活用している。小学校においては、ダッシュボード利用時間の長さや学校へ相談出来る関係づくりに貢献している。岡崎市においても、データ項目を整理の上、教員、児童の状態を可視化することで、教員、児童、親との関係向上に生かされたい。
- ・アプリの導入に伴い、教員が行う日々の児童生徒の所管記録が軽減され、捻出した時間で児童生徒に寄り添う指導ができたことは大変素晴らしいと感じた。アプリによる可視化されたデータに全て頼るのではなく、教員の指導経験を補完する仕組みが教育現場に導入されることは、教員も時代の変化に応じた働き方を実践できる一手となり得ることであり、本市も学校教育へのICT・DX活用を一層推進されたい。日々、子供たちが入力したデータで子供たち自身も保護者も一緒に成長を感じ取ることが可能であり、コミュニケーションツールとして大変評価できる。子供たちの変化を教員や保護者

	<p>がつかみ、いじめや家庭環境等の変化の兆しを早期発見し、早期対応につなげるには、子供、家庭、学校をリンクし、データの可視化が必要である。本市の取組を評価し、不足点を洗い出し、強化する必要があると感じた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 渋谷区の小中学校教育において、子供一人一人の幸せの実現に向けて、2022年から教員向けダッシュボード、2023年には児童生徒向けのダッシュボードが運用を開始した。特に教員向けのダッシュボードは、教員の経験と勘による指導方法を補完するため、生活の記録等を活用し、子供の興味関心や悩みを丁寧に見取り、個々の状況を踏まえた指導、支援につながっていた。本市においても、今後さらにICTを効果的に活用するため、ダッシュボード等の導入検討に加えて、職層に応じた教員研修を実施していくことでさらなる利活用と教職員の働き方改革につながると思われる。 ・ 教員向けダッシュボード活用において、教員はもちろん保護者からもよい。教員の目、本人の声、以前の複数のデータを掛け合わせ、客観的な子供の理解が可能となり、例えば、保護者からの相談やクレームに対して、ダッシュボードの情報により客観性が向上し、保護者の納得を得やすくなる。教員も学級運営が効率的にでき、また子供たちの心情変化やSOSがいつ頃から発生したのか、時系列で追うこともできる。児童生徒向けダッシュボード活用において、教員と子供たちとのコミュニケーションの選択肢が増え、また子供たち自身が自分の得意不得意を把握し、主体的な学習ができるようになるとの効果がある。授業・学習系データ、校務系データを集約して可視化し、教員の気づきをその集約データで裏付ける。これは具体的な指導ができる方法として理想的な取組と考える。本市にも採用されたい。 ・ 毎回思うことだが、現地に出向いて直接お話を聴くということの重要性を強く感じる。今回説明を受けて感じたことは、デジタル化時代になっても、学校・教育現場に大切でもっとも重要なものは、人と人、顔と顔、心と心の見えるつながりだと思う。特に顔を見て話をすることの重要性を教育現場に毎回強く感じる。人の目には非常に相手の心が見えるのかも。また見えるように努力をしなければならないと思う。デジタル化は時代の流れだと思うが、セキュリティ問題や機器の不都合が無いようにされたい。人、機器等をうまく使っていくことが大切だと思う。
<p>委員長の総括</p>	<p>本市においてもデータ活用の推進はより必要であると考え。渋谷区では生成AIの導入を積極的に行い、働き方を改革している。本市も積極的に導入に努め、現場の効率性の向上、それに伴い児童生徒に向き合う時間をより増やされたい。その際は、個人データの取扱いには十分配慮されたい。</p>